

「四季・植物」 1 胡瓜

学名 Cucumissativus L.

ウリ科の一年生つる草

インド原産で西域から伝来したと伝えられ、胡（西域民族）の瓜という意味でこう名付けられたという。

郷土資料から見た胡瓜のあれこれ

八坂神社の御紋は、胡瓜の切り口をあらわしたものだという。昔、八坂神社・石井神社・柏崎神社の三社が祭のみこしで喧嘩をし、八坂神社のみこしが負けて胡瓜畑に追いつめられた。この際に、氏子に一人の怪我人も出なかったことの記念だと言われている。

その後八坂神社の氏子は、畑の胡瓜は必ず八坂神社にあげてお礼を言ってから食べるようになった。

胡瓜は日本各地の祇園信仰と関わりが深く、胡瓜を「祇園社の神饌とし、祭の前後には食べなかったという土地もある」と「日本大百科全書」に見える。

また、橋場地区は古くから胡瓜の生産地だったが、その種を改良した「刈羽節成」という品種があった。「節ごとに実をつけ、病害虫に強く、寒地にむく」特性に、明治末期には全国から注文が殺到し、最高の年で米俵180俵もの種子が出荷されたという。「胡瓜採種組合員200名、耕作面積14・5町歩、昭和32年農協取扱い11石、商人取扱いはこの倍位」（「こどものための柏崎物語」）とある。この品種改良に功績のあった与口虎三郎・重治父子の碑が橋場に残る。

参考資料

「柏崎市伝説集」	柏崎市教育委員会編	1985	「花の大歳時記」	角川書店発行	1989
「柏崎市史資料集 民俗編」	柏崎市史編さん委員会編	1986	「日本大百科全書」	小学館発行	1994
「広報かしわざき」	柏崎市役所発行	1997	「こどものための柏崎物語」	笹川芳三著	1960
「草木花歳時記 夏」	朝日新聞社発行	1999			